

I

発達理解研究グループ

「子どものつまずきに応じた支援を探る」

～漢字学習につながるカタカナ指導・学習に向かうための姿勢（身体）づくり～

<研究員>

| | | |
|----------------------|------|--------|
| 吹田第二小学校 | 教諭 | 深山 純子 |
| 吹田東小学校 | 教諭 | 林 晴奈 |
| 佐竹台小学校 | 教諭 | 人見 真由 |
| 千里みらい夢学園 千里たけみ小学校 | 指導教諭 | 川向 博子 |
| 千里みらい夢学園 千里たけみ小学校 | 教諭 | 河瀬 はるか |
| 千里みらい夢学園 千里たけみ小学校 | 教諭 | 西岡 芳恵 |
| 第二中学校 | 教諭 | 許斐 早苗 |
| 豊津西中学校 | 教諭 | 武田 直美 |
| 西山田中学校 | 教諭 | 小林 恵里 |

<スーパーバイザー>

| | | |
|----------|-----|-------|
| 神戸親和女子大学 | 准教授 | 森田 安徳 |
|----------|-----|-------|

1. はじめに

発達理解研究グループは、「子どものつまずきに応じた支援を探る」というテーマのもと研究を進めています。

発達に課題を抱えている子ども達が、クラスの中で安心し、充実して過ごすためには、子ども達の花つまずきをしっかりと把握するとともに、つまずきに基づいた支援方法・指導内容を具体的に検討し、実践することが大切だと考えています。

平成 28・29 年度はテーマを 2 つ設定しました。「漢字の学習が苦手な子ども」「姿勢保持が困難な子ども」に焦点を当て、困難を抱えている原因を探るとともに、つまずきに応じた支援方法・指導内容について研究を進めることにしました。

2. 研究テーマ

9 名の研究メンバーを 2 グループに分け、それぞれのグループごとに研究テーマを以下のようにを設定しました。

漢字学習につながるカタカナ指導 . . . (漢字・カタカナグループ)
学習に向かうための姿勢 (身体) づくり . . . (身体づくりグループ)

3. 漢字学習につながるカタカナ指導

(1) 研究目的・方法

ア はじめに

文字に関して子どもたちの課題を挙げていくと、「どの学年においても漢字の習得につまずく子が必ずいる、低学年でつまずくと学年が上がってもつまずくことが多い」、という意見が挙げられました。

漢字の習得につまずく原因は、音訓 (読み)、意味、形など様々に考えられるため、漢字の指導に難しさを感じることも多いようです。様々なつまずきの原因がある中で、今回は「漢字の形」を取りあげました。漢字の形を部分に分解していくと、漢字の構成要素として、カタカナが入っていることに注目し、以下の目的を設定しました。

イ 研究の目的

- (ア) 漢字の中にカタカナ文字が含まれているかどうかの調査をする。
- (イ) カタカナテストの作成・実施をする。
- (ウ) カタカナの誤り分析をする。
- (エ) カタカナの文字表記の誤り分析をもとに漢字字形の指導法を検討する。

(2) 方法と結果

ア 漢字の中にカタカナ文字が含まれているかを調査をする

まず、1年から3年の間に学習する漢字 440 字の中に、カタカナの形が含まれている漢字の数を調査しました。4年以上の漢字は、既習の漢字が組み合わさってできていることが多いため、3年までの漢字を調査の対象としました。

例えば、2年で学習する「長い」という漢字には、カタカナの「レ」の形が含まれている、というように、漢字の形の中に含まれているカタカナ文字の数を調査しました。



| 漢字につながるカタカナ索引 | | |
|---------------|---|---------------------------------|
| 1年 | 1 | (部首) 竹【たけかんむり】 |
| | 0 | (その他) |
| 2年 | 4 | (部首) 算、答、等【たけかんむり】 数【のぶん】 |
| | 0 | (その他) |
| 3年 | 4 | (部首) 第、笛【たけかんむり】 整、放【のぶん】 |
| | 0 | (その他) |

【備考欄】

- 女・・・(4画目は不要だがケの形が入っている)
- ×欠・・・(2画目がはねている) 「歌」2年 「飲」3年 「放」3年
- ×族、短、知、鉄(矢)・・・(ケが入っているが、余分な画がある)
- ×後、祭、冬、物、路・・・(ケに似ているが形が違う)

図1 漢字につながるカタカナ索引

どのカタカナがどの漢字に含まれているのか、わかりやすいように図1にまとめました。私たちは、この図を「漢字につながるカタカナ索引」と名付けました。

1年でのカタカナの学習に留まるのではなく、この先の漢字指導を見据えてカタカナを指導することが必要であることが分かります。1年でカタカナを指導する際に参考にしていただければと思っています。

次に、漢字につながるカタカナ索引をもとに、どのカタカナ文字が漢字の形の中に含まれているか、グラフにまとめました。(図2)

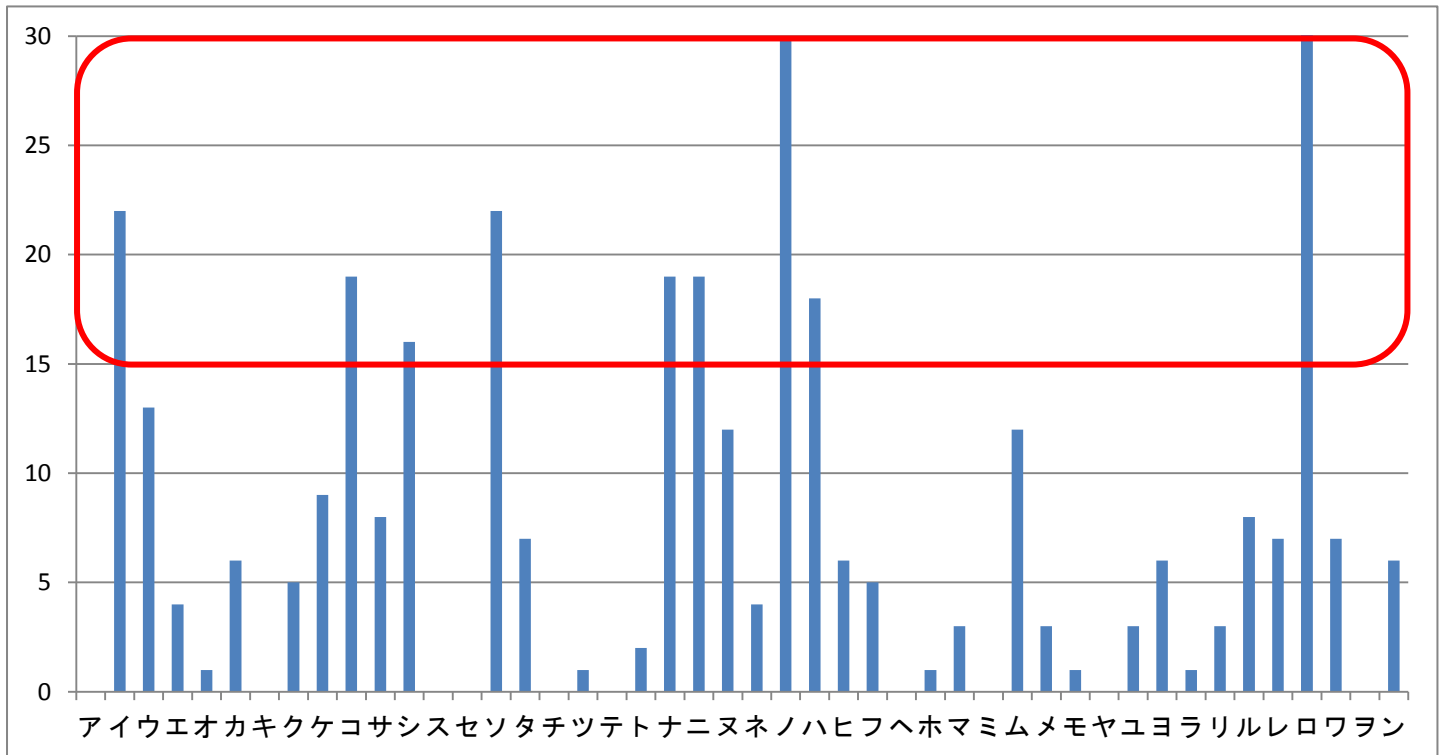


図2 どのカタカナ文字が漢字の形の中に何個含まれているか

図2では、一番左を見ると、「ア」が含まれている漢字の数は0個、「イ」が含まれている漢字の数は22個と分かります。15文字以上の漢字の中に含まれているカタカナは赤い枠で囲んでいます。例えば「イ・コ・シ・ソ・ナ・ニ・ノ・ハ・ロ」は15文字以上の漢字の中に含まれていることが分かります。その他、部首の中にカタカナが含まれているため、漢字に多く含まれているカタカナもありました。「イ(にんべん)、ウ(うかんむり)、エ(たくみ)、タ(ゆう)、ツ(つかんむり)、ト(ぼく)、ノ(の)、ヒ(ひ)、ム(む)、ロ(くち、くにがまえ)」です。その中でも「ロ」は、「くにがまえ」の中に含まれているため、60個以上もの漢字に含まれていました。

このように、多くのカタカナが漢字の形の中に含まれていることが分かりました。

イ カタカナテストの作成・実施

カタカナが定着していない子も見受けられるため、カタカナテストを実施しました。テスト作成のポイントは3つです。

- (ア) 問題にするカタカナ文字を語頭におくこと
- (イ) イラストをわかりやすいものにする
- (ウ) 問題にする文字を○で囲むこと

以上のことを踏まえ、テストを作成しました。そして、1年生～3年生を対象に、A小学校147名、B小学校300名に対しテストを実施しました。

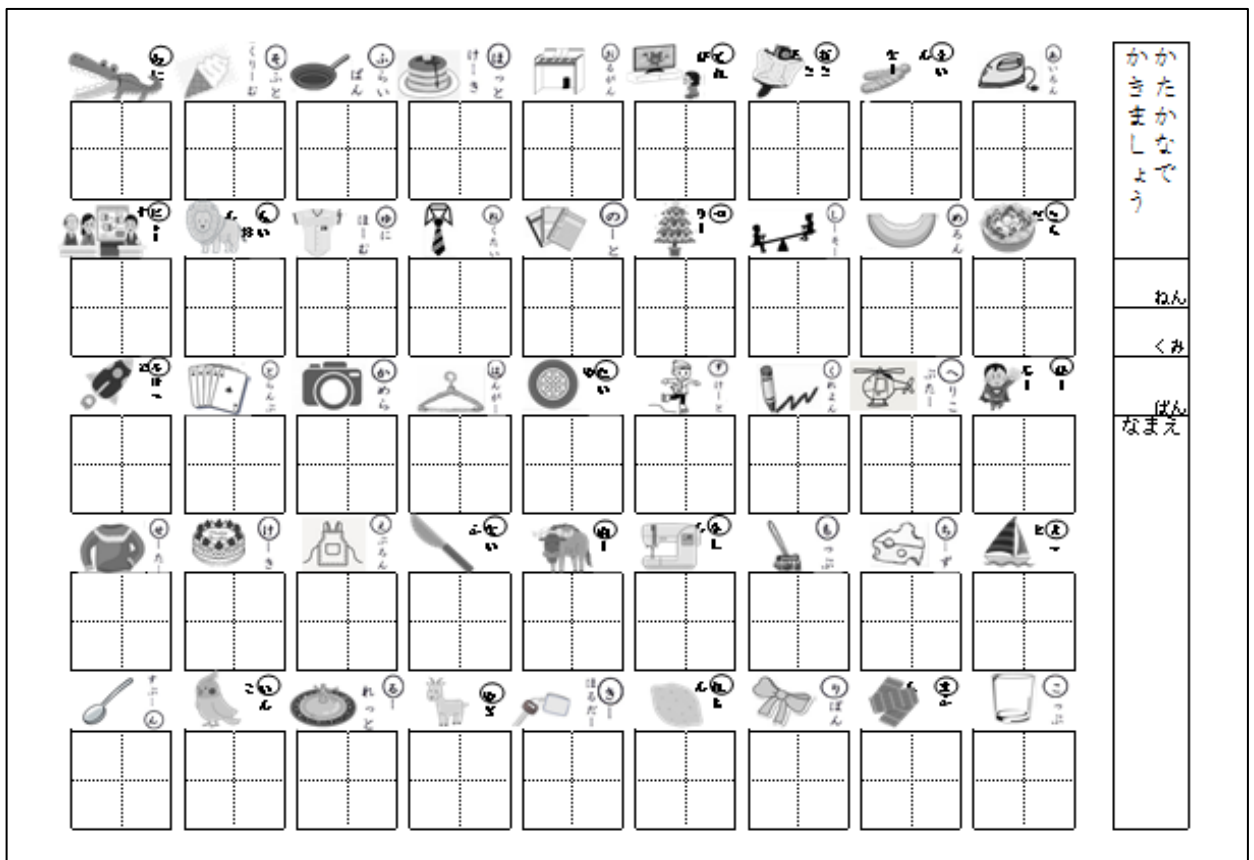


図3 カタカナテスト

(3) 来年度の予定

平成29年度、実施したテストについて誤りを分析し、分析をもとに漢字字形の指導方法を検討していく予定です。

4. 学習に向かうための姿勢（身体）づくり

(1) はじめに

ア 児童の現状

学校における授業の様子を見ると、児童が姿勢を保持できない状態が目につきます。そして、姿勢が保持できないことで学習が効果的に達成できないことが考えられます。姿勢保持ができないと、手の動きに円滑さが欠け、目と手の協調が難しく注意や集中が維持できないことにつながると考えられます。以下に、「学習に向かいやすい姿勢、学習に向かいにくい姿勢」についてまとめます。

イ 学習に向かいやすい姿勢



坐位姿勢では、顎を軽く引き、背筋を伸ばした状態で膝 90 度、足首 90 度に曲げ、足底を床に着けます。以下の方法で、確認することができます。

①骨盤を上前方へ引き起こします。→②自然と背筋が伸びます。→③そのままの姿勢で膝 90 度、足首 90 度に曲げ、足底を床に着けます。

今回は学習場面の坐位姿勢に焦点を当てますが、立位姿勢も参考として合わせて説明し

ます。一本のライン上に、耳、肩の外側の骨、骨盤の外側の骨、膝の皿の後ろ、くるぶしが通ることが理想です。

ウ 学習に向かいにくい姿勢

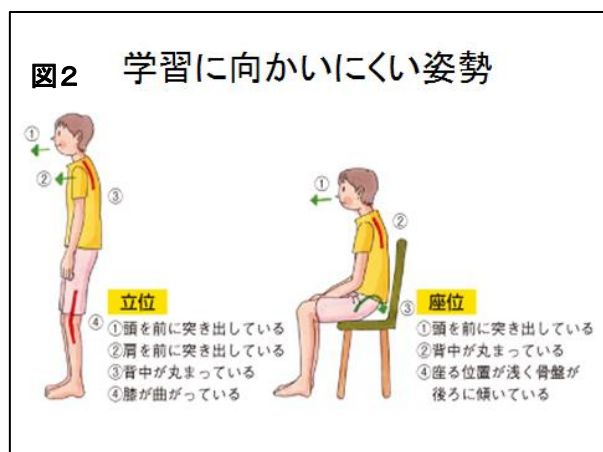


図2の座位姿勢は、イラストのように背中丸くなり、骨盤は後方へ倒れてしまっています。この図は足の裏が床についている姿もよく見かけます。しかし、図2の姿勢で授業を受けていると、大きく2つの課題が考えられます。

a 背中丸くなり、胸が閉じることによって脳に回る酸素量が減り、覚醒レベルが下がります。覚醒レベルが下がると、注意集中、姿勢保持力が低下します。

b 上肢（手）の操作性が低下します。手は、体幹と接続している為、体幹が安定していないと、手の操作性も安定しません。

このように注意集中、姿勢保持力の低下、目と手の協調の難しさなどから学習意欲の低下につながると考えられます。

エ 理想的な座位姿勢



教室で子どもたちは、ほとんどの時間を座位姿勢で過ごします。そのため、理想的な座位姿勢を保つためには、まず机と椅子の高さを合わせる必要があります。ただ理想的な姿勢を保持することは、かなり困難です。長時間の保持は難しくとも、体の感覚として知っている、意識できるということが大切と考えます。

(参考文献：教科書(書写)【東京書籍】)

(2) 研究目的

姿勢保持の苦手な児童への支援方法として、今年度は下記の(3)アとイを目的としました。担任が短時間で評価できる評価方法と基準を検討し、それらをもとに児童の現状把握を行いました。以下に、その内容を述べます。

ア 児童の姿勢(立位・坐位・臥位)に関する評価方法を作成し、評価と基準の検討をした。

* 「JMAP:日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査」を参考とする。

イ 作成した評価方法を児童に実施し、児童の姿勢保持力を調査する。

ウ 継続的にできる体操を考え、実施し、変化を検証する。

(3) 研究方法

ア 評価方法・基準を決める。

(ア) 腹筋(背臥位屈曲姿勢)

【方法】

- ①測定時間は20秒間
- ②仰向けに寝て、腕は胸の前でクロスし、脚は膝を曲げた状態で胸に近づける。
- ③頭を持ち上げる。

【評価基準】

- ①頭が床に着く。
- ②足が伸展する。
- ③腕が胸から外れたり体が動いたりする。

(イ) 片足立ち

【方 法】

- a 測定時間は20秒間。
- b 開眼・左右の支持足を測定する。
- c 腕を胸の前で組み、片足で支持し反対側の脚は膝を90度後方へ曲げて立つ。

【評価基準】

- a バランスが崩れ、支持足が動く。
- b 曲げている足が床につく。
- c 組んでいる腕がほどける。

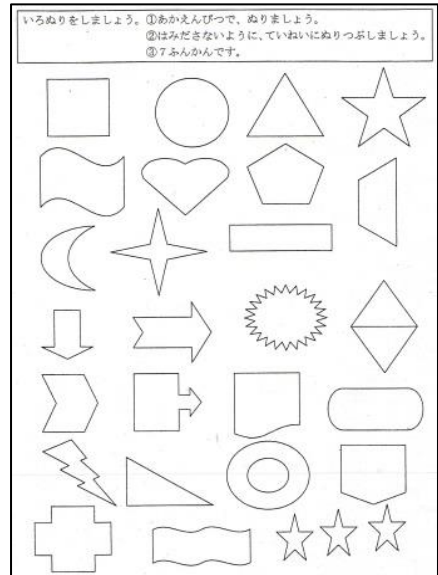
(ウ) 机上での作業操作としての色塗り

【方 法】

- a プリントに色をぬる。
- b 赤鉛筆を使用する。
- c 時間は7分間

【評価内容】

- a ビデオを観察
- b 色の塗り方・作業スピード



色塗りプリント

(エ) タンデム歩行

【方 法】

幅4cmのテープ上を、踵と爪先をつけて2m歩く。(10歩)

【評価基準】

- a 線から足がずれる。
- b 腕を使いながら歩く。
- c 踵と爪先の間が離れる。

イ 評価方法・基準を決め、4年・1年で実施し、方法・基準が妥当か検討する。

実施内容

| 月 日 (曜日) | 対象学年 | 実施人数 | 測定したもの |
|-------------------|------|------|----------------|
| 10月25日(火) 4時間目 | 4年1組 | 23人 | 腹筋・片足立ち・タンデム歩行 |
| 11月18日(金) 朝の会 | 4年1組 | 24人 | 机上の作業としての色塗り |
| 12月7日(水) 3時間目 | 1年1組 | 36人 | 腹筋・片足立ち・タンデム歩行 |
| 12月9日(金) 朝の会 | 1年1組 | 36人 | 机上の作業としての色塗り |

(4) 結果

ア 腹筋



右から2番目の児童は、頭が持ち上がりにくく、頭が上がっても持続できません。足をあげている時は、体が左右に動いてしまいます。両サイドの児童はしっかり屈曲姿勢を保持することができました。

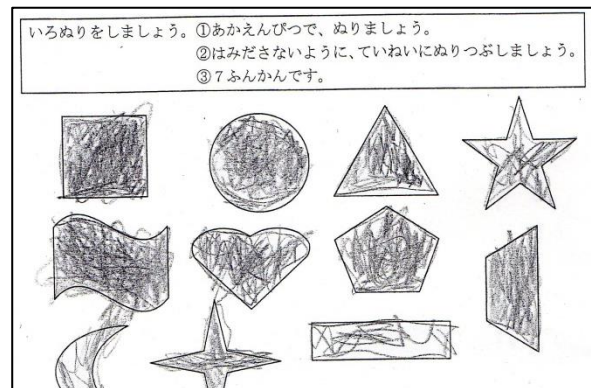
イ 片足立ち



腹筋と同じメンバーです。

右から2番目の児童は、片足が上がりにくく、上がっても支持足がすぐに動きました。

ウ 机上での作業操作としての色塗り



プリントは、写真の白丸の児童が塗ったものです。線からはみ出したり、塗り方が均一でなかったりします。作業は集中して行っていました、机に伏せたり起こしたりを繰り返し、姿勢の保持が困難な様子でした。この児童は片足立ちや腹筋でも、自分で自分の身体を支えきれず、すぐに足や頭がつき、体幹の弱さがみられました。

エ タンデム歩行



この児童は、線上を歩くと、大きく手を振りながらバランスをとっています。踵とつま先の間が広がることで、体が支えやすくなる為、足が線からはずれたり、足と足の間に隙間ができていたりしていました。

(5) 考 察

- ア 45分間のテスト時間で、「1年生1クラス36人、3項目（腹筋・片足立ち・タンデム歩行）の測定」は実施することができました。しかし、「短時間でより簡便にできる測定方法」を考えると「タンデム歩行」は、テスト項目から除いてもよいのではないかと考えます。片足立ちは静的な支持、タンデム歩行は動的な支持の力が必要です。机上の学習に向かう姿勢には、静的な支持力が大きく関わる為、「片足立ち」だけでもよいのではという理由からです。測定項目としてタンデム歩行を入れるかどうかは、今後検討する予定です。
- イ 片足立ちでは、立位姿勢そのものが不安定で保持できない児童がいました。片足立ちの測定をする時、立位姿勢も評価項目に入れようということになりました。
- ウ 今回は、机上での作業項目として、「色塗り」を行いました。その様子を横からと、後ろからビデオに撮り、学習の姿勢保持についての評価方法と評価基準を検討しようと考えました。しかし、一人ひとりの姿勢の状態や様子を、クラス全員のビデオから判断することは難しく、基準を決めるまで至りませんでした。そこで、次年度は、「腹筋・片足立ち・タンデム歩行」の3項目の評価から、気になる児童のみをピックアップし、その後作業の様子をくわしくみていく方向で考えています。また「色塗り作業」は、児童にとって楽しい課題となり、自然と集中して行っていたが、授業となるとそうはいきません。机上作業課題として、学習的な要素が入ったものの方がよいのではという意見もあり、作業課題を再検討します。
- エ 4年生と1年生では、測定時の様子が大きく違いました。できるだけ小さいうちから身体作りを行うことが大切だと思われれます。平成29年度の測定は1年生で実施することとします。

(6) 次年度に向けて

- ア 今年度検討した「姿勢に関する評価方法と基準」で、以下の項目を明らかにする。
(ア) タンデム歩行を評価項目に入れるかどうか。
(イ) 机上での作業についての「評価方法」と「評価基準」を決める。
- イ 新しい「姿勢に関する評価方法と基準」に基づき、1年生を対象にする。
※5月・12月の2回行う予定。
- ウ 継続的に、短時間で取り組める体操を考え、評価したクラスにおいて6ヶ月間実施する。
- エ 体操を行うことによる児童の変化を考察する。